

中池見湿地の自然とラムサール条約登録までの道のり

笹木智恵子(NPO法人ウェットランド中池見)

中池見湿地の自然概要

・位置：敦賀（つるが＝福井県）市街の東側にあり、東部沈降地域といわれる場所。余座池見、中池見、内池見とよく似た地形、三つの池見（いけみ＝水のある所という意）が南北に連なっている。その真ん中にある池見ということから「中池見」と名付けられている。JR北陸線・敦賀駅から約2 km、歩いて30分ほど。

・概要：特徴は大きく三つに分けられる。

① 地形：天筒山、中山、深山と三つ山に囲まれて盆地状をなし、湿地面標高は約46m、深さ80mのすり鉢状の地形で、地理学では「袋状埋積谷」と呼ばれる特異なもの。深さ80mのうち上部約40mが泥炭層で、約13万年分の堆積といわれる。面積は25町歩といわれ、かつては全面田んぼで農耕が行われていたが、現在は湿原の様相。

→ラムサール条約登録基準1, 3

② 生物相：多様な水環境と複雑な地形から、さまざまな生態系が形成されているため、多くの動植物が棲み分けをしており、その数は3000種を超える。多くの絶滅危惧種が普通に生息・生育しており、いきもののホットスポットと称されている。特にトンボの確認種は73、メダカは、キタノメダカの模式産地とされている。また、野鳥ノジコの渡りの中継地としても重要な場所と判明している。

→登録基準2

③ このような場所が市街地のすぐ近くに現存していた奇跡。また、歴史的にも、農耕文化的にも希少な地域である。

これらのことが評価され、2012年にラムサール条約登録湿地として認定された。

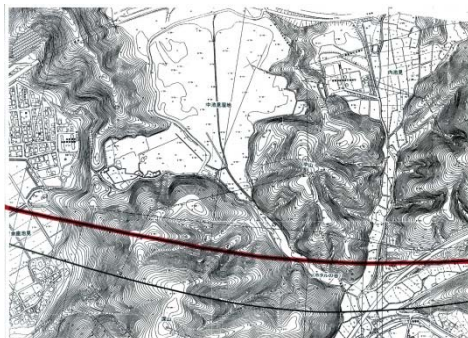
開発計画と保存活動、ラムサール登録までの道のり

・開発計画：開発計画は、1981年3月に策定された敦賀市第三次総合計画（目標年次：1990）に書き込まれた“都市像”の一つとして、“活気みなぎる港湾・流通都市”をめざしての考え方に基づいての立地調査が始まる。その結果は年次中間の1985年12月に「樫曲

地区工業団地基本構想」としてまとめられていたが、私たちが知ることになったのは、1990年3月に策定、公表された第四次総合計画で具体的に明記されたからであった。その後、この計画に基づき各種調査が行われたが頓挫。1992年6月に突如、大阪ガス（株）の液化天然ガス（LNG）備蓄基地誘致を当時の市長が議会で発表。2002年の計画中止決定までの10年間、大阪ガスによる調査、工事計画が着々と進められた。

・保存活動とラムサール登録への道のり：1990年秋に発足した市民団体「緑と水の会」によって中池見の保存活動が始まり、ガス基地計画の進展と共に発足した「中池見を伝える女たちの会」、「つるが草の根の会」、「中池見シボラの会」などと連携して活動を拡大。1996年には、この4団体が幹事団体となって「中池見湿地トラスト」を設立、2筆712㎡の土地を取得、共有地トラスト運動を全国展開し、開発へのブレーキとした。事業者の計画中止、計画地を敦賀市に寄付、撤退決定を受けて活動団体の有志、支援者により2003年に「NPO法人ウェットランド中池見」を設立。当初より目標としてきたラムサール条約登録に向けて啓発、働きかけを推進した。この間、国内外の多くの団体、研究者などの支援、力添えを受け、敦賀市長をはじめ行政も前向きになり、2012年7月にラムサール条約登録が実現した。

・新たな開発計画浮上：かねてより計画中の北陸新幹線の着工認可により、中池見湿地の集水域に900mのトンネル掘削計画が浮上、湿地の水環境への影響が危惧されている。



北陸新幹線の計画ルート(赤:認可ルート 黒:アセスルート)